



ニセ学生



まるど88

ニセ学生

一郎は今や60歳である。だが、工場に勤めていて、いまだ非正規雇用だった。流れ作業とはいってもけっこう複雑で、時間には追われるし、よく年下の正社員さんに叱られていた。そうしてある日、なんべん教えたらわかるねん、とめっぼう叱られ、帰宅して酒を飲みながら、もう、明日辞表を出そうと思った。そうしてふと、パソコンをいじってフェイスブックを見ているうちに、若いころの友人知人は今ごろどうしているのかと、名前を検索してみた。と、高校の時の親友が出世していて、今は東京の公立高校の教頭になっているのがわかった。子供が3人いて、孫までいるようだった。フェイスブックとは便利なものである。酒の勢いもあり、40年以上昔の、18歳の頃の情景が蘇ってきたのだった。そう、大学生だった、あの頃の。

昭和49年、西暦1974年だろうか、青葉茂れる新学期、四月。東京山手線池袋駅から高田馬場(たかだのばば、あの忠臣蔵で有名な。といってもピンとこない方もいるかも?)駅へ。高田馬場からバスに乗り、都の西北、ワセダ大学へ向かうふたりの若者の姿があった。

気のせいだろうか、道ゆく一般人が、尊敬の眼差しで見ているような気がする。だが一郎は早稲田の学生ではなかった。彼は高校からの親友、寺西に誘われ、いっしょに早稲田の門をくぐっただけである。寺西は天下の早大生、一郎はただのオマケだ。それどころか、駅弁大学であろうがなんであろうが、地元大阪の大学にかるうじて入ったその学費を親がぜんぶ出してくれているというのに、そこには行かず、こうして寺西の通うワセダまで、わざわざ神戸から遊びに来てしまったのだった。

高校3年の夏休み、寺西は図書館で必死に勉強した。家庭や学校で嫌なことがあるうがなからうが、何ヶ月、いや何年にもわたって、彼は勉強してきたのだ。一郎はただ怠け、せねばならないことから逃げ回っていた。その結果、自慢できる境遇にも何にも辿りつけなかったのは、太陽が東から昇るのと同じように、当たり前のことなのだった。そうしてそれは、いつかは世を去る自分の両親を、喜ばすことも一度とてなく、ということになるのだった。

東京に来たいきさつは、単に、神戸から上京して新入生になる寺西を送ろうとJR神戸駅まで行ったら、ちょっと東京まで遊びに来えへんかと誘われ、快速電車に乗ったのがこの始まりで、乗り継ぎ乗り継ぎしていくうちに、向かいの座席に座ってるおばさんたちの方言が変わっていくのが面白くもあった。

高校は最低ぎりぎりの成績で卒業出来たのだった。3年生になると、人間関係がいやになり、しょっちゅう休むようになり、もうちょっとで卒業できないところだった。高校のことはなにひとつ思い出したくなかったが、それでも、親のおかげで大学なるものに入ることができたのだ。高校のときは、学校サボって溜まっていたところが、寺西の家だった。寺西も学校が嫌いだったが、やることはやっていたのだ。成績はトップクラスだった。サボって酒を飲んでいううちに、お前絵がうまいなということになり、東京の、日大芸術学部を目指せよと激励されたのだった。昼間は親も誰もいない寺西の家で、高校サボってウイスキーをあおり、いじめられっこでも、今に見ておれと雄叫びをあげるのを、寺西も全面応援してくれたのだった。こんなにいいヤツはいないと、ふだん、周りから馬鹿にされないがしろにされてきた一郎は、思った。だが、それも今は昔、けっきょく、日大芸術学部どころか、大阪の、比較的簡単な美大の、そのまた付属の短大を受けたがすべり、寺西を失望させたのだった。

バス停を降りて、すごく大きな、歴史のある校舎や校庭(キャンパス)を歩くと、ちょっとした町のような二セ早大生がいるのかどうか分からないが、もし一郎がほんものの早大生なら、しんどい受験勉強をくぐり、栄冠を勝ち取った者のみが味わうことのできる、若人(わこうど)の街を、彼はいま誇らしく歩いている筈だった。いま彼は、夢のような空間に、いるはずであった。さまざまなサークルの看板、知的な雰囲気、マジックで書きなぐった看板のどれもが、若者の治外法権、特権の王国を表しているように見えた。

「こうやって、早大のキャンパスを歩いてると、ああ、いろんな友人たちが、僕のことを支援してくれて、僕のことを応援してくれたんだな、と思うよ。そうして、なんだか、申し訳ないなあ、とも思うよ」

「ええ、なんで？ 申し訳なく思う必要ないやんか。がんばったんやから」

「いや、なんか、申し訳なく思うよ。こうやって、みんなが僕のこと、支えてくれて、応援してくれて」

「そうかあ、えらいなあ寺西」

寺西はあんなに関西弁だったのが、入学して間もないのに、東京弁になっていた。それに、「俺」とか「わし」と言っていたのが、「僕」に変わって、すましている。

「おい堂山、お前も来年は日大の芸学目指せよ。そしたら僕みたいに、こんないい気分でキャンパスを歩けるんだぞ」

寺西は折にふれ、こうやって東京に出てきたからには、日本大学の芸術学部を目指せよと言っていた。本物のアーティストになれば、応援してくれてもいた。ところがじっさいは、親からときどき、早く帰って来いという手紙とともに、一万円札が何枚も同封せられてくるのに(住所は伝えていた)、四畳半の寺西の、池袋にある6千円の安下宿に同居させてもらっているという引け目からか、なしくずしに彼らにおごってしまい、それで終わりなのだった。

旧友、寺西だけに奢るならともかく、たまたま一緒にいるよく知らない連中にも奢ってしまうので、数万円はあっという間になくなった。寺西の好意で置いてもらっているという根無し草状態が、いつまでも続いた。

それでも楽しみはあった。銭湯にも行ったし(あとでそれについても書いている)、高校のころ片思いしていた同級生に似た、若い女の子の写った選挙のポスターを、剥がして持って帰ろうかと思った事さえあった。また寺西と、池袋の居酒屋で酒を飲んでいたとき、イラストレーターという、30代くらいの男性と意気投合したこともある。

「こいつ、来年は芸大受験する予定なんですよ」

と寺西が紹介する。

「へえー、堂山くんとかいったね、ちょっとここに、絵を描いてみてくんない？」

熱爛とつくりの首を、たくろうの歌じゃないが、つまんで、

「いやあ、下手ですよ」

と言い訳しつつ、男の人の出した紙切れにとりあえず人の顔でも描いてみた。

「お、いいじゃん！永島慎二みたいだね」

「ながしましんじ、ですか。みずしましんじとは、違うんですか？」

「水島新司なんかとはレベルが、こんなに違うよ」

と、そのひとは両手を上下に拡げて言った。水島新司は、当時はやっていた野球漫画家である。永島慎二は絵も内容も、純文学的な作風だということを、ずいぶん後で知ったが、その永島慎二に似ているなんて、言ってくれたのだった。

まあ水島であろうと永島であろうと、一郎にとっては嬉しいことだった。その夜の日本酒は旨かった。そうしてセブンスターをふかす。はたちにはなっていないが、酒もタバコも、大学生なら許されるかんじがあった。四畳半で寺西と、長々と芸術談義に花を咲かせた。

だが結局、勉強しようにもアルバイトやっては寺西の授業に付き合い(授業は、面白そうだった。女子学生も、たくさんいた。学生はみな、東京弁か、東北っぽいことばを喋っていた)、ぼうっとワセダを見学したり、つまらんトラブルに巻き込まれるだけで、終わってしまったのである。

一郎は、スーパーの、野菜のかんたん皮むきのアルバイトについた。アルバイトするとお金がもらえるし、いいことである。一郎は3ヶ月前、3回ほど寺西がバイト、行けなくなったとき、ピンチヒッターとして、ここのアルバイト先に来ていたことがあった。

そのとき寺西から、大阪駅弁第三大学であることは、言わない方がいいぞと言われていた。そのアルバイトは大学生が多かったのである。

「ほならわし、同志社大学いうことにしとくわ」

「そやな、それがええ」

寺西の代わりにバイトへ行ったその当日、さっそく先輩から「きみ、どこの大学だい？」

と、関東弁で聞かれた一郎は、兼ねての申し合わせ通り、「同志社大学です」

と答えた。

「どこにあんの？」

「京都です」

「へええー？でもなんで、こんな遠くまで来てんだい？」

「あのう、僕いまちょっと、こっちに来てて、やりたいことあって、休んでるんですよ」

口べたな一郎にしては、初対面の相手にながゼリフがよく言えたものである。

「おいらよう、大学行ってねえからよう。大学、行きたかったなあほんとによ。だからさあ、うらやましんだよねえ」

「あ、そうですかあ」

なんて会話を、野菜の皮をこっちは剥きながら、先輩はもっと高度な、切り仕事しながら、言っていたのだった。

それからわずか3ヶ月しか経ってなくて、その質問したひとこそ、都合で別の部署へ異動になってはいたが、何人かは、元のままだった。そういうところへ、高校時代から、そんなに親しくはなかったが、寺西を通じて知り合いだった一宮から、こんなことを頼まれたのである。

「なあ堂山、じぶん神戸大学在学ということに、なってるねん。そういうことに、しといてな」

「ええーっ？そりゃまずいで」

「なんでえ、ええやんか。神戸大て言うたら、みんなの見る目もちがうぞう」

「いやあ、そやけどなあ」

「ええやんけ。タカハシさんに言うたら、えらい感心してたで」

「いや、じつはな、まえに俺、同志社やて言うてるねん。たぶん、覚えてる人おると思うでえ」

「覚えてないって。きのうおれ、こないだから来てる堂山君、じつは神戸大学なんですよて言うたら、誰もウソやなんて言うてなかったで。感心してたで。な、あした堂山勤務やる？話し合わせといてや」

と、笑いながらボン、と一郎の背中を叩いた。

まずいことになったなア、バレなければいいが、と、翌日はバイトは寺西も一宮も来ていない。昼間、彼らはワセダの学生として、授業中である。その日の仕事は一郎は、午前中だけだった。

仕事場に着くと、親分肌で、うるさ型だがきつぷのいいあんちゃんの、タカハシさんが、さっそく喋って来た。

「神戸大学なんだって？」

「え、いや、まあ」

「すごいじゃん！何学部？」

「えーとう、ぶ、文学部です」

「文学部？ 賢いんだなあ。おれ、中学しか出てないからよ」

と、尊敬も含めた、あたたかい笑顔でタカハシさんは言った。

午前中の作業が終わり、どうもさっきから、見覚えのある、30前後くらいの男の人が、話しかけてきた。

「堂山くん、サ行変格活用って何？」

「へ？ え、えーとう、さ、産業変革？」

「ちえっ、まあいいや」

と苦笑して、その人は昼休みのため、作業部署から出て行った。

一郎の顔から、冷や汗が出た。

その日は一郎にとって、午前だけの仕事だったので、まだしも天の助けだったろう。一郎の愛読書、「人間失格」で、主人公が学校の体育の時間、鉄棒に走って行って、ぶら下がるはずのところを、幅跳びみたいにむこうまでとんでしまい、尻もちついて、あいたたた、とやったら、クラスメイトや先生の爆笑を買って、大ウケだったときに、背後から知恵遅れの竹一に、ふいに肩をたたかれ「ワザワザ」と言われたときの、あの、顔から火が出るみたいな、あの、恥ずかしさ、あれと同じだったのだ！ バレてる。完全に、バレてる。あの人は覚えていたのだ、3ヶ月前のおれのセリフを。

それから更に、その推定30才の人の軽蔑の視線に知らんぷりを、冷や汗をかきつつしばらくの日数耐えていた。一緒に寺西や一宮と仕事することもあった。

そんなある晩、いつものように居候している寺西の部屋で皆、たむろしているとき、

「なあ堂山。おまえ明日、一宮の代わりにタイムカード、押したってくれや」と寺西に言われた。

「え、ど、どういうこと？」

一宮が大学の授業でバイトに行けない日、堂山は暇やからバイト、多いやろ？ そいでもって、一宮のタイムカード、ときどき押したってよ。というのだった。

「一宮ほら、家が貧乏で大変なの、お前も知っとうやろ？ 高校のときから苦勞続きで。あいつこそ、苦学生の典型やで。そやからちょっと、手伝ったってほしいねん」

「えっ？ で、で、でもしかし、ばれへんかなあ」

一郎は緊張すると、どもる癖があった。

「いちいちタイムカードなんて見てるかいな。ばれへんばれへん」

と寺西は言う。一宮もそこにいたので、一郎から、どう思う？ と話を振ったが、ええんちゃうか？ と一宮本人も、他人事みたいにお気楽なかんじで、言う。

「堂山考えすぎやねん」

という寺西のひとことに、一郎も決心した。まあ、考えすぎやな俺も、と。さっそく翌日、タイムカードを押すことになった。一宮も寺西も英語の授業があるので、語学は欠席するわけにはいかないという。

翌日、一郎は誰より早く出て、他の人に見られないように一宮のタイムカードを押す予定だった。が、もともと朝寝坊で、しかも意志のからきし弱い一郎は、いつもと同じ時刻に起きてしまった。寺西は、まだこの4畳半で寝ていた。起こさぬよう、そろっと池袋の下町のぼろい下宿屋を出て、新大久保のスーパーへ。

皆がざわざわやって来る時刻に、一郎もやってきた。そして事務所にある、自分のタイムカードを押す前に、一宮のタイムカードを、さも自分のタイムカードのように素早く押し、トイレを借りに行った。トイレから出てから作業用のエプロンをつけ、あっ、タイムカード押すの忘れた、という顔をして(口には出さず)、慌てて始業の8時半のほんの少し前にやってきて、こんどは自分自身のタイムカードを押して持ち場へ行った。事務所には女の事務員さんと、男の課長さん、それに2、3人の人がいた。

「何か、用事？」

課長が声をかけた。

「あっ、いえいえ」

きょろきょろしてたんやろか？ いや、そんなことはあるまい。考えすぎや、考えすぎ。

作業をし始めて30分ほど経ったとき、

「ちょっと堂山君、事務所来てくれへんか？」

と課長に呼ばれた。2階に案内されると、年配の部長もいた。課長が言うには、君は何か不自然なかんじで、タイムカードを2回押したように、僕には見えたので、調べてみたら一宮君のタイムカードも押してあるじゃないか。間違えたの？ と言う。

しどろもどろになり言い訳するも、辻褄の合わないことだらけで、結局、一宮君に頼まれてやりました、云々と白状した。

堂山一郎も一宮も、解雇となった。寺西の下宿にいつものように皆が集まり、ことの顛末を語り合ったあと、寺西が呆れたように言った。

「堂山おまえ、一宮の唯一の収入を絶ってしもたんやぞ。あのバイト、気楽やいうて、気にいってもいたのに。一宮に、謝れよ」

その声は淡々としていて、呆れられ、諦められた、静かな響きを持っていたが故に、余計に一郎の胸にずしりとこたえた。

「いちみや、すまんっ！」

「いや、ええよ」

と、一宮も諦めた顔で、言う。

「堂山おまえ、一宮ええやつで、良かったなあ」

もういちど、一郎はぺこりと一宮に頭を下げた。

しかしなぜか一郎の脳裏には、一宮に対する申し訳ない気持ちより、あんちゃん風でも、素朴に神戸大学を信じて感心していたタカハシさんや、こんなずるい事をされて裏切られたと、すごく残念そうな顔をしていた、いつもは温厚だった部長や、課長の顔のほうが、いつまでも思い出されたのだった。あのタカハシさんも俺のこと、学歴詐称、おまけにタイムカードまで！クズみたいな奴やったんや、と軽蔑してるだろう、もちろんあの推定30才も。

わあっ、と叫び出したい衝動にかられた。俺はこんなところで、こんなところでいったい何をしているんだあ？と。

だんだん日々がが憂鬱になって来た一郎は、昼間歩いていても、ぼうっとして、何をしているんだかわからなくなって来た。それは、高校のときにこんな性格のせいで、もみくちやになり、憂鬱症を発症して以来の、再発だったろう。しかし一郎自身は、ズボラな性格のせいか、高校のときからずっと、病院を訪ねることさえなかった。

そういう状態のまま、寺西の家でご飯をごちそうになっていても、ぼうっとして箸が止まることが多かった。

「おい堂山、……、どうやま、どうやまくん？」

「あ、えっ？」

「どないしたんや、ぼーっとして」

「あ、いや、大丈夫や」

「明日おれ、新生生の歓迎会が上野公園であるんや。俺、明日は早起きするんで堂山、家でゆっくり留守番しとけや」

「ああ、そうやな」

久しぶりで、寺西を訪ねて来るざわざわした連中もおらず、しかも寺西までいない。羽を伸ばして昼寝でもするかと、あしたへの期待が膨らんだ。このところ、自分が悪いのはわかっているのだが、チョンボ続きで、どうも居心地が悪かったのだ。ひとりになれるのは、有難かった。ただ、寺西から、俺はいつも朝起きられへんから起こしてくれとは言われていた。

翌日の朝9時、一郎は目が覚めた。寺西はまだ寝ている。たしか朝の9時半には出るみたいなことを、言っていたような。9時20分となった。寺西はぐうぐう、いびきをかいて寝ている。9時30分となった。まだ寝ている。起こさねば。だが、なんとなく気後れがする、なぜだか？9時45分になり、10時となった。一郎は、おそろおそろ、寺西の肩をたたいた。

がばっ、と跳び起きた寺西は、

「なんで起こしてくれへんかってん！」

「あ、えっとう」

「起こしてくれ言うたやろう！」

「すまん」

「あーあ、もう遅刻や。一緒に行くぞ上野公園に」

「……、」

「何してんねん早よ準備せえや！」

せっかくの、ひとりっきりの休日が、またこんなことに。なぜに起こさなかったのだろう？しかし寺西も、なぜに自分で起きなかったのだろう？とはおもった。起こしてくれとは言われたが、自分で目覚まし時計でもかければいいのにも思ったのだった。

最近の一郎は学歴詐称事件、タイムカード事件により、すっかり自信を無くしていた。更に、高校時代からのうつ症の再発である。

ふたりは上野公園に着いた。

「おまえ、向こうからまわれ。おれはこっちから回るから」

「あ、ああ。わかった」

上野公園のなか、今日は春のよく晴れた日曜日。幾つもの若人の集まりが、その大学の歌なんか歌って、盛り上がっている。

「ほうせーい、ほうせいほうせい、ほうせーい！」

これは法政大学であろう、一郎はその若人(わこうど)の賑わいの中、ぼうっと彷徨い続けた。いろんな大学の新生生たちが、それぞれ輪になって集まっている。そうして歌を歌ったりサンドイッチを食べたり、自己紹介をしたりしているようである。

賢い大学ばかりなんやろうな、と思いつつ、何をしてもなく、しかし、寺西に怒られてはいかんの、急ぎ足で歩いてはいた。

むこうから寺西が走ってきた。ずいぶん息が切れている。

「見つかったか」

「え？い、いんや」

「おまえ、声かけしたんかよ」

「えーと」

「このアホッ！声もかけんと、同じワセダの学生って、わかるんかーっ！」

「……」

「すいません、ここ、ワセダの集まりですか？と聞いてまわらんと、どこのグループか分からへんやろうーっ、そんなんもわからんのかこの、どあほ！」

こんなんやなかったんや、と思った。昔の寺西は、こんなんや、なかった。もっと親切で、一郎の絵の才能に驚嘆し、おまえ絶

対アーティストになるんやぞー！と、安いハイニッカやダルマをがぶ飲みしては、ふたり泣いて叫んだあの日々。

高校のとき学校をサボって寺西の家にたむろしたとき、寺西の親爺さんは大手造船会社の課長で、昼は仕事で家にいないし、母親は早くに亡くなっていて、その隠れ家で、高校のいじめっ子みたいなしょうもない奴らから一郎は逃れるため、また、寺西はそんな弱虫ではなかったものの、自分もワケありの家庭環境、また、外から見たよりはずっと傷つきやすい性格で、なぜかふたり意気投合し、親友と呼べるまでにさえなっていた。

寺西がいなければ、ビートルズも太宰治も一生、知らずじまいだったろう。一郎は勉強しない、つまらない怠け者だったが、勉強の代わりに、寺西に教えてもらったビートルズと太宰から、多くを学んだのだった。

それがいまはどうだろう？ 一郎自身が、寺西の期待に応えず勉強もさっぱりせず又、いじめっ子に立ち向かって行くこともせず(彼の弟は弱虫だったが、中学のそのいじめっ子に勝つ方法おしえたるわい、と言って、寺西が弟に喧嘩のやり方を教えた場面を見たことがあった。弟は兄貴に小突かれながら練習し、後日ついにそのいじめっ子に勝つらしい)、そういう、ケンカを学ぶ勇気もなく、かと言って勉強で見返すべく努力もせず、ただただ、嫌なことを避け続け、そうして、遂に親友からも見放されたのに、違いなかった。

ふたりして不毛な捜索を続けたが、遂にワセダの新生入生歓迎会の輪を、見つけることは出来なかった。一郎にとっては、籍もない大学のニセ学生として、こうやって若人の集まりのなかを彷徨い、青春を謳歌する、自分より勉強をがんばった、自分より優れた人生を歩んで行こうとする学生たちを、羨望のまなざしで眺めるだけの、旧友には迷惑をかけどおし、また、チョンボをし、まともやペナルティがついただけの、ただのお客さん、おまけ人間の、春の晴れた一日であったのだ。

一郎はもう、すっかり無口になっていた。それこそ太宰治の『生れてすみません』の、心境だった。俺が悪いんや、俺が悪いんや、寺西にも、一宮にもと。

そんな、八方塞がりの日々もとつぜん、終わる。芦屋（神戸の隣町、父の社宅に一家で住んでいた）から父親がやってきたのだ。東京駅で会い、一郎は、まだ帰るわけにはいかないと父に言ったが、とにかく話をしようと、新幹線のなかに一郎を呼んだ。一郎が、とりあえずと新幹線ひかり号に乗ると、すぐにひかりは発車してしまったのだ。当たり前といえば当たり前である。

なんの逆転ホームランもないまま、あれから40年の歳月が流れた。一郎はいくつも職を代わり、親を喜ばすこともないまま、とうとう嫁の顔さえ見せてあげられぬまま、父は亡くなり、実家の母も認知症になり、施設へ。絵も、いつのまにかいっさい描かなくなっていた。

ひとり暮らす、ゴキブリの出没するぼろアパート。半年頑張って勤めたマホービン工場の契約社員、電動ドライバーで把手のつけかたをなんでも間違えるので、なんべん教えたらわかるねんと、20以上年下の上役さんに、大勢の前で怒鳴られ、明日辞表を出そうとしたが、ふと、フェイスブックで酒を飲みながら遊んでいるうちに、かつての親友、寺西を見つけたというわけなのだ。

その親友も、高校時代はバンドをやって、シンガーソングライターになるんやと息巻いてはいたが、そっちの夢は叶わなかったようだ。

ただ、一郎は明日、勇気をもって辞表が出せるだろうかと考えていた。そうして、やっと人間らしい生活が、出来るかな？などと勝手な空想をしながら、いつまでも酒を飲み続けた。

（補遺『東京の銭湯』）

東京の銭湯で、やたらと丁寧に洗う一宮(いちみや)。皆、彼を几帳面といい、一目置いていた。一郎は、皆に迷惑かけまいと、早く、簡単にしか洗わなかった。

が、皆は風呂屋に行ったとき、誰も一宮に、早くあがれよなどと言わなかった。一宮は几帳面だから、ひと風呂浴びるのに1時間以上かかったが、皆、脱衣所でコーヒー牛乳とか飲みながら、おとなしく待っているのが常だった。

いちどだけ一郎が、風呂のあと急にお腹が痛くなり、トイレに行ったら、トイレから出たとたん、脱衣所の仲間連中から「遅い！」「トイレぐらい風呂の前に行っとけよ！」「湯冷めしてしまっただろ(東京生活の影響で、はやくも関西弁は消えている)風邪引いたらどうすんだよこのやろうっ！」

ほんの五分待たただけなので、笑いながら「わりい、わりい」と冗談めかして言うと、ひとりが、一郎の頭をポカリ！

皆、真顔で怒っている。なんでや？

いっぽう、一宮がゆっくり丁寧に体を洗って、皆が待ってもそれは、風呂のさいの、日常の行事、当たりのこととして、誰も不平を言わないのだった。

一郎は不満だった。ひとつには彼が、神戸大学という、ニセ学生で、一宮や寺西は、れっきとした都の西北という、一流大学生だということも、あったろう。しかし、神戸大学のニセ学生になれば、さかんにけしかけたのは、当の一宮や寺西ではなかったか

。

ニセ学生

<http://p.booklog.jp/book/109592>

著者：まるど88

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/marudo88/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/109592>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/109592>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ